

伝道者の書1-4章「日の下の空しさ」

1A 新しいもの無しの地 1

1B 成果なしの世 1-11

2B 知恵による悲しみ 12-18

2A 快樂の愚かしさ 2

1B 事業の空しさ 1-11

2B 死んだ後の記憶 12-23

3B 日毎の労苦 24-26

3A 神の定める時 3

1B 人が付け加えられない時 1-8

2B 永遠への思い 9-15

3B 裁かれた後の行く末 16-22

4A 引き落とされる人々 4

1B 虐げ 1-3

2B 仕事での妬み 4-12

3B 知恵者への蔑み 13-16

本文

伝道者の書を開いてください、1章から読みます。

1A 新しいもの無しの地 1

1B 成果なしの世 1-11

1:1 エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。

エルサレムの王で、ダビデの子であるならば、彼はソロモンです。そして伝道者と訳されていますが、新共同訳はそのまま「コヘレト」とヘブル語を使っています。民を集めて語る人、という意味があり、それで伝道者と訳されています。彼がその生涯の晩年に、イスラエルの民に語りたい言葉を残すべく、この書を書きました。

1:2 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。1:3 日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

「空(ヘブル語:ヘベル)」というのは、「無意味だ」という意味です。元々の意味は、風や息であり、中身を持たないということです。私たちが労苦するのは、何かを残すためであり、実質のあるものが残るために労苦するのですが、ソロモンは、「それは無い、日の下においては労苦しても有益な

ものは出てこない」と結論づけています。午前礼拝でもお話ししたように、これが「日の下」におけることであることに注目してください。地上にあるもの、目で見えるものについての観察です。そして、もう一つ注目すべきことは、これらが全てソロモンの観察であり、主が彼に語られた啓示の言葉ではないことです。経験や観察によって得られる格言であり、預言者のように神からの、天からの言葉ではない、ということです。

そういった側面から見ますと、私たちは反面教師のように、ソロモンのこれからの言葉、格言から学ぶことができます。「主の中にいる、というところから離れたら、この地上はどうなっているのか？」ということです。そして、「死後の命、永遠の命の希望を持たないと、どのようなことになるのか。」ということを見ることができません。人々は、それでもこの地上に希望がある、何かやりがいがある、実質的なものを作り出すことができる、と思っていますが、ソロモンは、「それはない、みな無益である」と断言しています。

1:4 一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。1:5 日は上り、日は沈み、またもとの上る所に帰って行く。1:6 風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。1:7 川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない。川は流れ込む所に、また流れる。1:8 すべての事はものうい。人は語ることさえできない。目は見て飽きることもなく、耳は聞いて満ち足りることもない。

人はこの地上に生きていますが、地上における自然の現象はみな、新しいものはないということを実証しています。実は、これはアダムが罪を犯して、主が定められた地上の姿なのです。「創世記 3:18-19 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならぬ。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」土地を耕しても、そこから出てくるのは茨とあざみであり、汗して労働しても、何も残さずに塵に帰るのだというように主はお定めになりました。そして、使徒パウロはそのことを「被造物が虚無に服した」と言っています。「ローマ 8:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」

人は 4 節にあるように、一つの時代に生きています。その中で 8 節にあるように、何か新しいものを見たい、何か良いことを聞いてみたいと願っています。その目また耳は飽くことを知らないのですが、罪のゆえに呪われた地に住んでいる限り、それらの新しいと言われているものは、何ら新しくなく、物憂いということです。そして眺めてみると、次の世代でも前の世代で行っていることを、形が多少変わりこそすれ、結局は同じことを繰り返しているに過ぎません。

1:9 昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。1:10 「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たち

よりはるか先の時代に、すでにあったものだ。1:11 先にあったことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、それから後の時代の人々には記憶されないであろう。

ソロモンの観察のとおり、この新しい時代に私たちが生きているのに、いつの時代も聖書から学ぶことができているのはそのためです。技術が進歩した、私たちは文明化された、だから昔、聖書に書かれていることは時代遅れであり、私たちはそのような過ちは繰り返さないとしているのですが、聖書を信じる私たちは知っています、数千年前の人々と私たちは全く同じことをしています。昔あったことは、これからもあるのです。そして、「これは新しい」とみなが湧き立っているものは、先の時代の人々がすでに行なっていたことなのに、単に記憶されていないだけなのです。

この空しさ、この厳しい現実を知っている人であれば、私たちは、キリストにある新創造を感謝できるでしょう。「2コリント 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」キリストが死者の中から甦られました。これは、アダムが罪を犯して以来無かった新しいことです。もちろん、蘇生はありました。エリヤやエリシャは、死人を蘇らせました。けれども、それは同じ生身の体であり、必ず死ななければいけないのです。ところが、イエスは朽ちない体で甦られました。このキリストの復活によって、私たちキリストを信じる者は、新しい命を得ています。そして自分自身もこの肉体が復活します。そして最後に、この天地そのものが再創造され、全く新しくされます。

私たちが信仰を持ち、そしてその後の生活を以前のものの延長である、連続していると思っている人は、必ずつまずきます。まだ、自分ができること、自分にできるやりがいがある、日の下にはまだ新しいことがあると期待していると、ちょうど金持ちの青年のように、つまずいて悲しい顔つきで、イエス様のところから離れなければいけなくなります。日の下には新しいものは何もない、と知っている人こそが、ただキリストのみによって生きるのだという決断をすることができます。

2B 知恵による悲しみ 12-18

1:12 伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。1:13 私は、天の下で行なわれるいっさいの事について、知恵を用いて、一心に尋ね、探し出そうとした。これは、人の子らが労苦するようにと神が与えたつらい仕事だ。1:14 私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。1:15 曲がっているものを、まっすぐにはできない。なくなっているものを、数えることはできない。

私たちは、知恵を探り出し、その果実を箴言の中で学んでいきました。それはごく一部であり、箴言は三千を語った、とあります(1列王 4:32)。しかし、彼は主との交わりから離れて、天の下にある一切のことについて尋ね、探し出そうとしました。尋ねて探し出すというのは、主の与えられた尊い賜物です。私たちは、神についてのことについて一心に尋ね、探し出さないといけません。けれども、ちょうどマルタとマリヤの話のように、イエス様に自分の心を捧げるというその単純なところ

から離れてしまうと、ソロモンのようになってしまいます。その結果は、「つらい仕事」となるのです。

それは、「曲がっているもの」を見ていくという作業です。曲がっているから正す、真っ直ぐにできるのか？と言え、できないのです。私たちは、あまりにも安易に「そんなことであれば、こうすればいいじゃない。」と言います。しかし、神の憐れみがなければ、何一つ直すことはできないのです。ソロモンは、真っ直ぐにすることは、まるで無くなっているものを数えるようなものだと言っています。

1:16 私は自分の心にこう語って言った。「今や、私は、私より先にエルサレムにいただれよりも知恵を増し加えた。私の心は多くの知恵と知識を得た。」1:17 私は、一心に知恵と知識を、狂気と愚かさを知ろうとした。それもまた風を追うようなものであることを知った。1:18 実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識を増す者は悲しみを増す。

知恵を追い求めていくと、その行き着くところは狂気です。人の心がここまで陰険で、直すことができないのか？ということに気づきます。ですから悩みも多くなり、悲しみを増します。近代小説の小説家の多くが自殺していますね。それは彼らが天才で、一般の人々が見えないものを見て、絶望してしまったからだと思います。そこには人の直りようのない罪深さが横たわっているからです。

ですから、私たちは人のありのままの姿を見る時、必ずキリストにあって見る必要があります。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。(1テモテ 1:15)」それだけ罪深いけれども、そのために来てくださったキリストがおられる、ということを知ります。キリストがそれだけ憐れみ深い方なのだ。この罪深き世にわざわざ来られて、愛してやまず、そして死によってその対価を支払ってくださったのだ。ここにある神の憐れみを、その罪深さと共に見つめるのです。

2A 快楽の愚かしさ 2

そして、知識や知恵を多く持っている人にありがちな、次の段階に進むのです。狂気であり、快楽によって、今を過ごそうと思うわけです。

1B 事業の空しさ 1-11

2:1 私は心の中で言った。「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」しかし、これもまた、なんとむなしいことか。2:2 笑いか。ばからしいことだ。快楽か。それがいったい何になろう。2:3 私は心の中で、私の心は知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけようと考えた。人の子が短い一生の間、天の下でする事について、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていようと考えた。

彼は心と体を分けて、心は知恵によって導かれました。王としてその務めを果たす時は、これまでと同じように、実に知恵深い統治を行なったのでしょ。けれども、その務めが終わるやいなや、ぶどう酒を飲み、快楽にふけて、その愚かさの中に何か良いものが出てくるかどうかを試してみ

たのです。ところで、ソロモンの宮殿における日用の食糧は尋常ではありませんでした(1列王 4:22-23)。

キリスト者になったと言えども、その代わりに、教会生活に面白さを見つけることができない人が数多くいます。それで、教会外で楽しもうとするのですが、ソロモンがここで書いているように、「笑いか。ばからしいことだ。快樂か。それがいったい何になろう。」なのです。楽しいように見える人々がしていること、そこには中身が全くありません。極度の、虚無感が残ります。なぜ、キリスト者の交わりが楽しめないのか？その楽しみは、喜びは「自分を捨てる」ところにあるのが、キリスト者の交わりの特徴だからです。自分ではなく、主ご自身を喜ぶこと、そして神の国を喜ぶこと、そこに聖霊の喜びがあります。「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。(エペソ 5:18)」

2:4 私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、2:5 庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。2:6 木の茂った森を潤すために池も造った。2:7 私は男女の奴隷を得た。私には家で生まれた奴隷があった。私には、私より先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊もあった。2:8 私はまた、銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた。私は男女の歌うたいをつくり、人の子らの快樂である多くのそばめを手に入れた。

快樂を楽しむだけでなく、快樂を得ることができるべく事業に取りかかりました。この様子を垣間見ることのできるの、列王記第一 10 章です。銀は石ころのように使ったとあります。そしてシェバの女王など、諸国が宝をもって彼のところに貢ぎました。そして 11 章には、そばめのことも記されています。実に七百人、妻は三百人であり、合計千人もいたのです。

2:9 私は、私より先にエルサレムにいただれよりも偉大な者となった。しかも、私の知恵は私から離れなかった。2:10 私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。2:11 しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

様々な事業に取り組んだ結果、「なんと、すべてがむなしいことよ。」ともものすごい虚脱感に襲われています。「振り返ってみると」と言っていますが、事業をしている最中は気づかなかつたのでしようが、一旦終えてみて気づきました。その理由を次から書いています。

2B 死んだ後の記憶 12-23

2:12 私は振り返って、知恵と、狂気と、愚かさとを見た。いったい、王の跡を継ぐ者も、すでになされた事をするのにすぎないではないか。

新しい物を造り上げたと思ったけれども、振り返ってみると、自分がいなくなった後に全く何もなかったかのように、昔のことを繰り返すのではないかということが予測されて、虚脱感に襲われています。

2:13 私は見た。光がやみにまさっているように、知恵は愚かさにもまさっていることを。2:14 知恵ある者は、その頭に目があるが、愚かな者はやみの中を歩く。しかし、みな、同じ結末に行き着くことを私は知った。2:15 私は心の中で言った。「私も愚かな者と同じ結末に行き着くのなら、それでは私の知恵は私に何の益になろうか。」私は心の中で語った。「これもまたむなしい。」と。2:16 事実、知恵ある者も愚かな者も、いつまでも記憶されることはない。日がたつと、いつさいは忘れられてしまう。知恵ある者も愚かな者とともに死んでいなくなる。2:17 私は生きていることを憎んだ。日の下で行なわれるわざは、私にとってはわざわいだ。すべては空しく、風を追うようなものだから。

生きている時は、確かに知恵ある者は愚か者より、すぐれています。目を持っている、すなわち物事をわきまえて生きています。けれども、ソロモンは死についてはどうなのか？ということを考えるのです。愚か者も知恵ある者も、どちらも同じところ、墓に行くのではないか？という厳しい現実には直面しています。そして、その後で知恵ある者が記憶されて、愚か者が忘れ去られるのであれ、多少の報いはあるかもしれませんが、現実には生きている人は死んだ人のことをいつも記憶して、生活している訳ではありません。

これは、ソロモンは、日の下で起こることの中に、死ぬという現実を直視しているためです。それさえ直視していない人が、日本にはあまりにも多くいます。自分たちはいつか死ぬのだ、という意識がなく日々を生きています。ですから、ソロモンは神を忘れてはいないし、死という現実からも目を離していません。しかし、それより先は見えていなかった。墓に葬られて、そこから甦るというところまでは見ていませんでした。その時に、主は各自に報いを与えられます。ある人には永遠の命を、他の人には永遠の滅びを与えます。ですから、私たちが今、キリストの復活の力にあやかって生きているか、ということが大事です。

2:18 私は、日の下で骨折ったいつさいの労苦を憎んだ。後継者のために残さなければならないからである。2:19 後継者が知恵ある者か愚か者か、だれにわかろう。しかも、私が日の下で骨折り、知恵を使ってしたすべての労苦を、その者が支配するようになるのだ。これもまた、むなしい。2:20 私は日の下で骨折ったいつさいの労苦を思い返して絶望した。2:21 どんなに人が知恵と知識と才能をもって労苦しても、何の労苦もしなかった者に、自分の分け前を譲らなければならない。これもまた、むなしく、非常に悪いことだ。2:22 実に、日の下で骨折ったいつさいの労苦と思い煩いは、人に何になろう。2:23 その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい。

この後継者がレハブアムです。彼は愚かな後継者でした。ソロモンの築いた国の繁栄と栄華を、

国家を二分させることで台無しにしたからです。そして、労苦なしで分け前をもらっていく者たちは、必ず、何をもってその遺産があるのかをわきまえていません。だから、水の泡のようになくなってしまいます。そのことにソロモンは絶望し、悩み、夜も寝られなくなりました。ですから、彼は死という現実にはぶつかなければいけませんでした。偉業というのは、生きているからこそ守ることができるものです。死んだ後は、守ることはできないのです。自分で制御できない、どうにもならない。日の下のみを見ていると、確かに労苦は絶望であり、痛々しいことです。

そこで私たちは改めて、立ち帰らないといけません。私たちは主にあって労苦するのだ、ということ。主に対して仕えているのだということ。コリント第一 15 章の最後にあるように、「あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだではないことを知っているのですから。(58 節)」なのです。主にある労苦は決して無駄になることはありません。確かに、どんなに労苦しても、それが無駄に費やされてしまうかもしれません。しかし、主に対して行なっていれば、決して天の報いから漏れることはないのです。主に対して行なったということ自体が、報いの原因になっていますから。そして、死ぬ時まででなく、死んだ後にその復活において報いを受けますから。

3B 毎日の労苦 24-26

2:24 人には、食べたり飲んだりし、自分の労苦に満足を見いだすよりほかに、何も良いことがない。これもまた、神の御手によることがわかった。2:25 実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができようか。2:26 なぜなら、神は、みこころにかなう人には、知恵と知識と喜びを与え、罪人には、神のみこころにかなう者に渡すために、集め、たくわえる仕事を与えられる。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。

ソロモンは、労苦の実を毎日に与えられるその食事を、主にあって感謝して、それを楽しんで食べる、ここには感謝することができます。これは、私たちの主ご自身が教えて下っていることです。「マタイ 6:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」その日その日に、労苦があります。そこに、主の与えられた報いがあります。その反面、罪人は富を追い求めるので、毎日に与えられる糧にさえ満足していません。使徒パウロは言いました。「1テモテ 6:17 この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」

3A 神の定める時 3

そしてソロモンは、人が行なう労苦について、決定的にそれをできなくさせるものがあることを、3章の始め、1 節から 8 節までに書き記します。それは、「定まった時がある」ということです。

1B 人が付け加えられない時 1-8

3:1 天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。3:2 生まれるのに

時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。3:3 殺すのに時があり、いやすのに時がある。くずすのに時があり、建てるのに時がある。3:4 泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。3:5 石を投げ捨てるのに時があり、石を集めるのに時がある。抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある。3:6 捜すのに時があり、失うのに時がある。保つのに時があり、投げ捨てるのに時がある。3:7 引き裂くのに時があり、縫い合わせるのに時がある。黙っているのに時があり、話をするのに時がある。3:8 愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦うのに時があり、和睦するのに時がある。

新しいものを造っていると思っても、実はそうではないというのがソロモンの観察でした。では、何によって物事は動いているのかと言いますと、神によって定められている時によって動いているということです。生まれて、それから自分でその命を何とかするというのが人間の営みです。ところが、そうではない。死ぬことについて人は全く自分で制御することができません。実は生まれることもそうであって、そして人間のする全ての営みが、生まれることと死ぬことと同じように、自分たちではどうすることもできない、定められた時の中で生きているということです。

私たちが何かが起こると、それによって次はもっと大変なこと、あるいは逆にもっと良いことが起こるだろうと希望的観測を行います。例えば、草木を植えて、それで育つと、これからもずっと実を結ばせると勝手に非現実的に思いますが、いつしかそれ自体を引き抜かなければいけない時がきます。逆に泣いている時は、これからずっと泣いて嘆いて生きなければいけないと落胆しますが、いいえ、微笑む時がやってきます。そして世の中は不思議なもので、石を投げださないといけない時があるのに、集めなければいけない時もありますね。私たちは、何とかして自分の人生の舵取りをしたいと思うのですが、自分ではない「時」というものによって舵取りをさせられていることに気づく、ということです。

2B 永遠への思い 9-15

3:9 働く者は労苦して何の益を得よう。3:10 私は神が人の子らに与えて労苦させる仕事を見た。

これは1節から8節までの論理的帰結です。全てのことは主が、時によって定めておられます。したがって、私たち人間の労苦はそれに何か付け足すことはできない、ということです。労苦というのは、何らかの便益が出ること、何か残るものがあるからやりたいと思うのですが、そうではないのだとソロモンは言うのです。けれども、神は人間に労苦させる仕事を与えておられます。

この矛盾は一重に、アダムが罪を犯したら、労働において土地からの呪いを受けているからです。神から離れてしまった土地、贖われていない土地で起こっていることであります。しかし、贖われた地、天が地に降りて来てからは、その労働には必ず永続する実が結ばれることを知っています。私たちはその天における蓄えのために、今を生きることができます。「自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。(マタイ 6:20)」

そして、不正の管理人の警えからイエス様はこう言われました。「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。(ルカ 16:9)」

3:11 神のなさることは、すべて時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。
3:12 私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか何も良いことがないのを。
3:13 また、人がみな、食べたり飲んだりし、すべての労苦の中にしあわせを見いだすこともまた神の賜物であることを。

ここで、ソロモンの信仰が少し元気になっています。彼は、人との営みは時によって定められているのであれば、それをされている神は時を超えたところに存在する方、永遠の方であることを知っています。そして、人というのは、時という制約の中で生きているので、その時を超えた永遠を思うようにされています。ですから、午前礼拝で話しましたように、永遠の命というのが私たちに与える希望なのです。これは真実な言葉であり、パウロは、神は人の教育によって植えつけられた概念ではなく、異教徒であっても知っている方であることを教えました(ローマ 1:20)。

ところが、「神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」と言っています。しかし、それはソロモンが日の下で起こっていることに目を留めてしまっているからであり、私たちは神の啓示である聖書から、その初めと終わりを知ることができるようにされています。初めは、もちろん天地創造と人の創造です。そして終わりは、新天新地であり、そこにある天のエルサレムです。神のおられるエデンの園から、神と小羊のおられる光輝く都、そこで祭司であり王となっている私たちであります。御顔を見て生きるようにされます。そしてその間に、神から離れてしまった人のために、ご自身がキリストにあつて、その命を対価にして私たちを贖ってくださいました。ですから、ソロモンの言っている、日毎の糧で喜び楽しむことも確かに御心ですが、時を超えた神を、その与えられた啓示を信仰によって受け取って、喜ぶことができるのです。

ところでソロモンは、神が良い方だから、その永遠の計画の中で時を定めておられるはずであり、それで、神のなさることは時になつて、すべて美しいと悟っています。ソロモンは後に、死に対してもその時は美しいことを語ります。「7:2 祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。」そして詩篇の著者は「116:15 主の聖徒たちの死は主の目に尊い。」と、聖徒たちの死は神に定められたことで、しかも美しいものであることを述べています。

3:14 私は知った。神のなさることはみな永遠に変わらないことを。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。神がこのことをされたのだ。人は神を恐れなければならぬ。
3:15 今あることは、すでにあつたこと。これからあることも、すでにあつたこと。神は、すでに

追い求められたことをこれからも捜し求められる。

ソロモンは、日の下で起こっていることに絶望的なほど痛みを感じていましたが、それゆえ、神への信仰を回復させ、そして永遠の神がおられること、そしてその神を恐れなければいけないというところまで教えています。

永遠の神についてソロモンは二つのことを教えてくれています。一つは、すべては神によってなされていること、だから人間がそれに付け加えたり、取り去ることはできないことです。私たち人間は、何とか付け加えようとし、神の救いについて、キリストの十字架だけでなく、それ以上に何かをしななければいけないと考えます。そして、「律法の完成者キリストを信じる」ことが全てなのに、「それだけでは足りない。あなたは律法も守らないと救われないのだ。」と教えている、ユダヤ主義が教会に吹き荒れていました。そして、取り去ろうとします。主が語られることについて、それが他人について語られている分にはうなずいて、その通りだと言いますが、自分に語られていることだと悟ったときに、それだけは心の中で退けて、他の部分だけ、選り好みで聞いていくことをします。そのような人間主体であってははいけません。私たちはただ神を恐れるのみ、神主体なのです。

そしてソロモンは、もう一つ、永遠についての理解を与えてくれています。今あること、これから起こることは、すでに起こったこと、すでに求められたことであるということです。これは私たちの頭の中で考えたらさっぱり理解できませんが、永遠というのが時空を超えていることを知れば、想像できます。神にとっての今は、昔と同時期にあり、また永遠の将来とも同時期にあります。黙示録の新天新地の幻を読んでください、そこは過去形、完了形で書かれています。神は初めに、終わりまでの永遠の計画を立てておられるので、今起こっていることは、神の初めに定められたことが逆算して、展開しているのです。

3B 裁かれた後の行く末 16-22

次、16 節からソロモンは、日の下で起こっている不公正に目を留めていきます。

3:16 さらに私は日の下で、さばきの場に不正があり、正義の場に不正があるのを見た。3:17 私は心の中で言った。「神は正しい人も悪者もさばく。そこでは、すべての営みと、すべてのわざには、時があるからだ。」

不正があります。けれども、彼はその上に神がおられて、最終的に審判を下して下さることを信じています。時が来れば、その業が明らかにされると知っています。しかし、彼は死後についての確信がありません。

3:18 私は心の中で人の子らについて言った。「神は彼らを試み、彼らが獣にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。」3:19 人の子の結末と獣の結末とは同じ結末だ。これも死ねば、あれ

も死ぬ。両方とも同じ息を持っている。人は何も獣にまさっていない。すべてはむなしいからだ。3:20 みな同じ所に行く。すべてのものはちりから出て、すべてのものはちりに帰る。3:21 だれが知っているだろうか。人の子らの霊は上に上り、獣の霊は地の下に降りて行くのを。3:22 私は見た。人は、自分の仕事を楽しむよりほかに、何も良いことがないことを。それが人の受ける分であるからだ。だれが、これから後に起こることを人に見せてくれるだろう。

裁きの場に不公正があるので、人というのは尊厳が与えられていない、獣と同じだという誤った判断を下しています。正しい裁きというのは、そこに人が神のかたちに造られた、その尊厳があることを認める行為ですが、それがされないのが獣と変わらないではないかと言っています。けれども、違いますね。死んだ後に確かに、裁きがあります。「ヘブル 9:27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」しかし、彼は獣と変わらないで塵に戻るだけではないか、その後、どうなるかは教えてくれないではないか、と言っています。

ソロモンのような信仰の後退は、実に私たちにいつも起こり得ます。聖霊に拠らなければ、死後の命、そこにある報い、来るべき世において、私たちが受け継ぐもの、とてつもない栄光について知る由もありません。実に、十字架にある神の愛も、その愛は地上には存在しない、罪人のために死なれるというトンデモないものですから、聖霊の注ぎがなければ知ることができません。(エペソ 1:17-18、ローマ 5:5) 聖霊に満たされて、信仰の目で死後の命、死後の裁き、そしてキリストの愛を知らせていただくように、祈ってください。霊の目が鈍くされないように、心をいつも清めていただくように祈りましょう。

4A 引き落とされる人々 4

1B 虐げ 1-3

4:1 私は再び、日の下で行なわれるいっさいのしいたげを見た。見よ、しいたげられている者の涙を。彼らには慰める者がいない。しいたげる者が権力をふるう。しかし、彼らには慰める者がいない。4:2 私は、まだいのちがあつて生きながらえている人よりは、すでに死んだ死人のほうに祝いを申し述べる。4:3 また、この両者よりもっと良いのは、今までに存在しなかった者、日の下で行なわれる悪いわざを見なかった者だ。

裁判における不正だけでなく、労働の現場において権力ある者が虐げている姿を、ソロモンは観察しました。そして、この不正を見て、「生まれてこなかったほうがよかったのだ」とまで断じています。ヨブも同じようにして、自分の受けている不公平な苦しみに対して、自分の生まれた日を呪いました。ここにも、死後における神の報い、復活による報いという信仰が与えられていないので、そのような結論を出しているのです。

そして、キリストご自身の啓示が与えられていません。天地を創造された方が、人の間に生まれ、その不正を受けられたという事実があります。私たちはキリストにあつて、この世にある不

正、虐げを見ていくことができます。キリストは必ず、苦しんでいる小さき者と共におられます。わたしの兄弟たち、最も小さい者に対して行なったことは、わたしにしたことだと言われました(マタイ 26:40)。

2B 仕事での妬み 4-12

4:4 私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。4:5 愚かな者は、手をこまねいて、自分の肉を食べる。4:6 片手に安楽を満たすことは、両手に労苦を満たして風を追うのにまさる。

地上における不公正について、ソロモンは次に人の妬みを見ています。労苦や仕事の成功という良き物の中に、実は妬みという動機でそれを行っていたことを知った時の心の痛みです。どうでしょうか、していることは良いことであっても、それが誰かがしていることよりも自分が優れていることを示すため、あるいは、そのしていることの効果を少なくするため、その人が嫌がるだろうなと想像できるのに、それでもやるという無神経さ。そして、多くの人々が妬みによってやっている、偽りの善行であることを気づいていないという事実。これらは、辛いことであります。

ですから、ソロモンは労苦や仕事において、「そんなに頑張りすぎない」という知恵を語っています。ある人が妬んで、競争している時に、それに対抗していたら自分までその心が荒んできます。ですから、安楽、つまり、少し休むのです。仕事は勤勉にすべきもの、という基本路線は、箴言を書いた時から彼は変わっていません。ゆえに愚かな者が、手をこまねいているので自分の肉を食べると言っているのです。けれども、両手に労苦を満たすのではなく、片手には楽をさせておくというバランスを説いています。

4:7 私は再び、日の下にむなしさのあるのを見た。4:8 ひとりぼっちで、仲間もなく、子も兄弟もない人がいる。それでも彼のいっさいの労苦には終わりがなく、彼の目は富を求めて飽き足りることがない。そして、「私はだれのために労苦し、楽しみもなくて自分を犠牲にしているのか。」とも言わない。これもまた、むなしく、つらい仕事だ。4:9 ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。4:10 どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。4:11 また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなろう。4:12 もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

人を妬むことによって動けば、その人は孤独になります。友がいなくなります。自分だけで自分のものを求めます。けれども、それだけ追及しても、その先には実体となるものが何もないのです。これは空しいです。だから、ソロモンは、「自分は独りだと考えるな」と戒めています。自分の隣人、共にいる人がいるではないか？ということです。どちらかが倒れた時でも助け合えるではないか、と言っています。そこには、三つ撚りの糸があります。二人だけでなく、二人が集まればそこに主

ご自身がおられる、だから神とその二人、という強みを持ちます。

福音宣教の働きを見ると、使徒行伝や手紙には、パウロが「私」と書くよりも「私たち」と書いていることは、ここでソロモンが言っていることに関わります。パウロは、初めはバルナバと、そして途中からシラスと動き、そして信仰の子であったテモテと動きました。私たちは、自分たちのしている神の働きが決して、独りのものであると考えてはいけません。共有しているのだという意識と信仰が必要です。

3B 知恵者への蔑み 13-16

地上における不公正は、知恵がないがしろにされるところにもあります。

4:13 貧しくても知恵のある若者は、もう忠言を受けつけない年とった愚かな王にまさる。4:14 たとい、彼が牢獄から出て来て王になったにしても、たとい、彼が王国で貧しく生まれた者であったにしても。4:15 私は、日の下に生息するすべての生きものが、王に代わって立つ後継の若者の側につくのを見た。4:16 すべての民には果てしが無い。彼が今あるすべての民の先頭に立っても、これから後の者たちは、彼を喜ばないであろう。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。

貧しい出自であり、そして若者である、ということですが知恵があります。知恵があるのだから、それをもってその若者を指導者として立てているべきです。ところが人というのは、その人が神に立てられていることを初めは認めても、飽きるのです。自分たちが知恵に頼らなくなった、という根本的な問題があるのに、そうではなく、「この人は若者だから」「この人は貧しい出自だから」というように、難癖をつけて、主に抛り頼まなくなったことを、彼のせいにするという悪があります。妬みにおいても、こうした霊的な怠慢についても、表向きは自分たちが正しいことをしているとしていきますから、その欺瞞に対してソロモンは、空しいと言っています。

私たちはここで、自分を調べなければいけません。なぜなら、イエス様が、ご自身が初めは群衆に尊ばれたけれども、その期待通りでなかったのに、律法学者やパリサイ人、祭司長らの言っている言葉に耳を傾けていきました。知恵はどこらにあるのか？主体的に、自分で宝石を探すように探さなければいけないのに、怠慢になってしていかない。それで、「十字架につけろ」という声に反対することもなく、自分もキリストを十字架に付ける側に回ってしまうのです。主は、教会の中に生きておられます。主は、兄弟にしたことは、わたしにしたことだと言われました。ここで、自分自身を調べてみましょう。聖餐にあずかる時に、果たして、主が私たちの交わりにおられるということで、自分が知恵をないがしろにしていなかったか？お祈りしましょう。